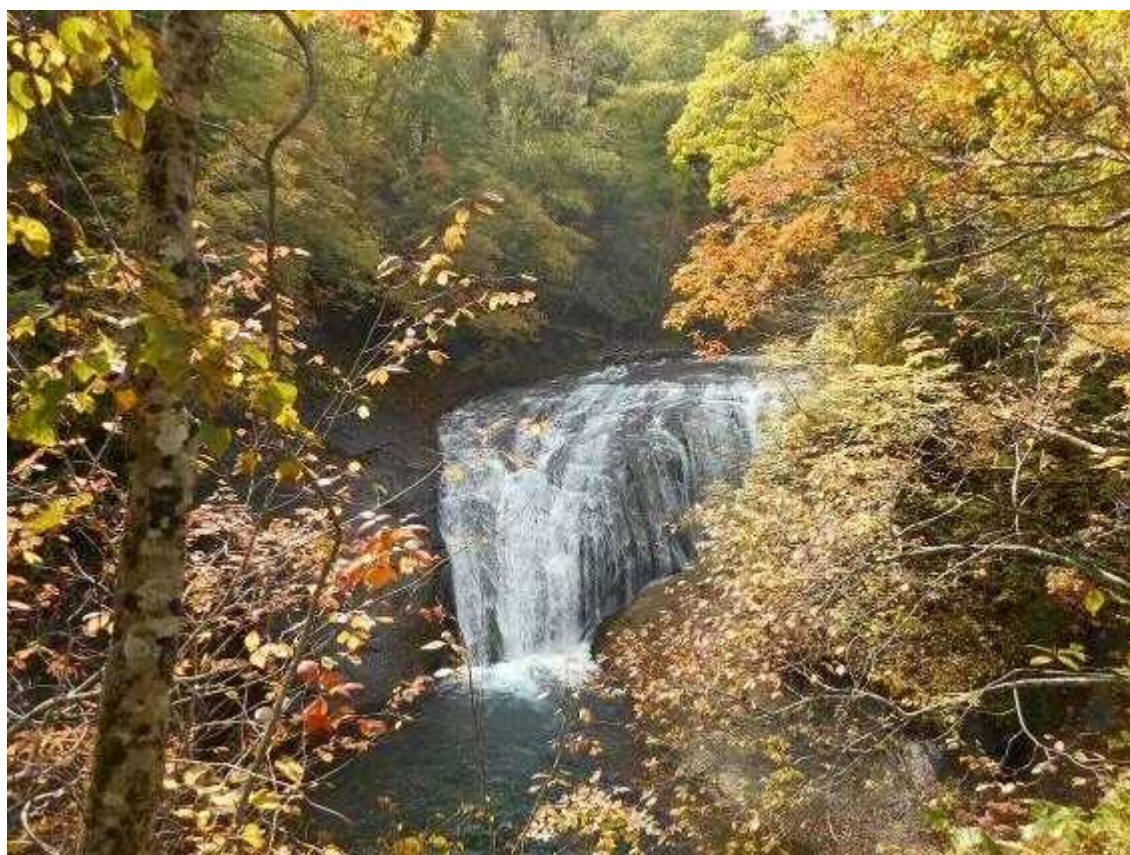


盤尻地区観光まちづくり事業化構想



盤尻地区観光まちづくり懇談会

目 次

1. 全体構想概念図	．．．．． 2
2. 観光事業化における現状と課題	．．．．． 3
3. 目的と方向性、展開、将来像	．．．．． 5
4. 課題整理の方向性と主な個別事業構想	．．．．． 10
5. 個別事業構想概念図	．．．．． 11
6. 広域連携概念図	．．．．． 12
7. 基本方針別個別事業構想 事業着手スケジュール	．．．．． 13
8. 参考資料 審議等日程	．．． 14
盤尻地区観光まちづくり懇談会構成員名簿	．．． 15

1. 全体構想概念図



2. 観光事業化における現状と課題

①地理的優位性と観光インフラ機能の現状

盤尻地区は、道道恵庭岳公園線沿いに大半の施設が配置されており、支笏洞爺国立公園や道都札幌市と隣接していることから、地理的優位性や交通利便性において優れた利点を有しています。

しかし、道道恵庭岳公園線道路改修や滝周辺の散策路整備、緑のふるさと森林公園など相当な公共施設整備が行われたにもかかわらず、一般的にあまり知られていないことや限定的な利用期間などにより利用者が伸び悩んでおり、様々な観光資源がありながら有効活用されていない課題があります。

また、有効な資源・施設が点在しながらも、駐車場、飲食店舗、トイレなどの観光において必要となる施設がないことも課題のひとつです。

②知名度、集客性、一体的事業の不足

この道道沿いの既存施設や機能には、公共施設だけでなく民間事業者の施設店舗も多く、さらに市民団体等の活動の場とする場面も決して少なくはありません。

現状では観光事業化するうえで重要となる、民間事業者、関係市民団体等と行政の連携・連絡の機会がなく、またこの地区全体の観光に関する窓口や広報手段、受入れ体制等が不明確であり、一本化されていないことが大きな課題です。

盤尻地区はそのポテンシャルの高さから、恵庭において体験型観光という新たな観光事業を生み出すことが期待できますが、実際には「具体的な事業メニューの拡充」と言う面が不足する部分であり、地域振興の具体策のひとつとして、豊かな自然環境と固有の産業遺産の観光資源としての活用と維持・保全活動の両立を目指した独自のツーリズム、すなわち「恵庭型ツーリズム」の推進と、その主体となる組織の設立や具体的な事業メニューづくりも課題と考えられます。さらには、圧倒的に不足しているこの地域全体としての広報宣伝活動の量的質的充実が必要です。

これらの課題解決が、恵庭渓谷をはじめとする盤尻地区全体の魅力を、そのあるべき姿を留めながら新しい観光資源として醸成していく有効な手法のひとつと考えられるものです。

③道道沿いの自然景観、歴史産業遺産の未活用

盤尻地区の優れた自然景観は、それ自体が観光資源となることから無秩序な開発による景観の悪化は避けなければなりません。しかしながら、森林鉄道跡などの歴史的産業遺産など貴重な資源が少なからず存在しており、これらを活用した観光においては、対象物である資源の風化や荒廃の防止が最大の課題となることから、ゆえに「多くの来訪者の誘致」が目的のひとつである観光産業の中にこれらが組み入れられることは、大きな矛盾と成り得る可能性もあります。

また、多くの観光地・景勝地においても来訪者によるゴミの不法投棄、動植物の違法持ち帰りなどによる資源の枯渇等の問題が見られることから、盤尻地区においても保全策が必要となります。

今後盤尻地区において観光まちづくり事業が進められた場合、いずれ「資源自体の風化・荒廃」という現実的な問題として表面化することとなり、そのために歴史や自然の資源を活用した観光事業は、「維持・保全の遂行」という課題への対応も必要と考えます。

3. 目的と方向性・展開・将来像

(1) 目的

上述した現状、課題などから盤尻地区を中心とする観光振興策としての、この構想策定の目的は次のとおりです。

①東西軸の観光まちづくりの実現

秩序ある土地利用と自然環境を活かした環境配慮型住宅地の形成により、都市ブランドを高め、札幌近郊の景勝地としての盤尻地区を市内観光の「玄関口」へと発展させるための地域情報・広報宣伝機能の拡大と観光資源化。

②「点」から「線」へ、滞留性・周遊性を拡大する観光拠点化

えこりん村や花の拠点（はなふる）といった市内の観光拠点と言われる各施設の賑わいを相互循環させ、市内での周遊・滞留・「人の流れ」を視野に入れた新たな誘客ルートを創出（＝ラルマナイ自然公園 ⇄ えこりん村 ⇄ 花の拠点（はなふる））等の東西軸方向での観光周遊や滞在型観光へ繋げる幹線を形成。

③道道沿い地域資源の活用・連携

盤尻地区の自然資源や歴史遺産の価値を広め、「観光資源化」に特化し共有することで、活用・保全への理解に繋げる。

(2) ターゲット、キーワード

今の時代の主となる消費動向とこれらの施設機能とから、利用対象層は以下のとおりと考えました。

①「アクティビティ好きな男性・女性」

この層がもっとも消費動向に敏感であり、主たる利用者層と想定されます。この層のもつ趣味・余暇活動・消費ニーズの変化、多様化・テーマの高まりに対応した空間、時間の提供により、利用者の拡大が図れます。

②近郊の「アクティブシニア」世代（60～70代）

健康志向が強く、「ゆとり」や「癒し」といった多様な付加価値を求める嗜好に着目し、「自然体験」と「知的探求」、を組み合わせた独自の価値観への充足感・空間を好む。

③アウトドア入門者、子育て世代の家族

初歩的な技術に特化したメニューを作成し、身近なこの場所でのアウトドアへの入門需要を喚起します。また、子育て世代の家族に対しては子どもの教育現場の総合学習・体験学習の拡充へも対応し、特色をPRします。

④インバウンド観光客

道内に訪れるインバウンド観光客は、道内の海産物をはじめとした食文化やスノーリゾートやアクティビティなどを求めて来道している傾向にあります。そのため、道内旅行の着地（行程）のひとつとして選ばれるように盤尻地区独自の体験型観光の充実と手軽さを両立するプログラムを構築し、盤尻地区の付加価値を高めます。

これらのことから、この構想、計画のキーワードは

☆森で遊ぶ・森で学ぶ・森で暮らす
 ・「癒し」、「自然」、「文化」、「歴史」、「体験」、「森の住宅」空間の演出と提供

(3) 課題整理の方向性、将来の展開

既存施設の利用状況や機能など考慮し、先述した課題整理のために、以下のような方向性、将来の展開などが考えられます。

①盤尻地区のまちづくりとしての取組み

令和3年版恵庭市都市計画マスタープランでは、それまでのJR3駅を中心とした都市機能の集約をさらに進め、「ガーデンシティの確立」として、恵庭市の東西方向に広がる自然環境や田園環境を「東西軸」として新たに位置づけ、観光レクリエーションなどのさまざまな利活用を図り、豊かな暮らしがあるまちを目指すこととしております。

盤尻地区はこの東西軸に位置し、豊かな森林地帯など自然景観に恵まれており、これら地域資源を活かし、さらに、新型コロナウイルス感染症まん延防止による生活スタイルの変化に対応した自然環境での暮らし、レクリエーション機能の拡充、適切な土地利用や景観づくりなど新たな恵庭市の魅力を高める取り組みを展開します。



図2-1 将来のまちづくりイメージ
 出典「令和3年版恵庭市都市計画マスタープラン」

②総合案内・広報機能の充実と既存施設の地域内連携

～インフォメーションセンター機能とソフト機能の必要性や充実、連携

盤尻地区に限らず、恵庭市全体、特に観光事業全般に共通することは、広報、宣伝、情報の圧倒的な不足です。この解決のためには、単なるパンフレットの作成にとどまらず、どこに配布したか、誰に伝えたかということが重要となり、ターゲットへの確実な伝達手法を採用する必要があります。そうしたことを意識して、この盤尻の地域名を全面的に打ち出した広報業務に取りかかることが必要だと考えられます。

この地区を「花の拠点」、「えこりん村」に次ぐ、新しい観光拠点、点から線への観光創出、「幹線」形成の可能性を持つものと考えれば、利用者の休憩飲食、さらには市内全域の観光案内機能、さらに情報媒体機能などの必要性が考えられます。

地場産品等の物販や軽食コーナーの併設、収益性の確保とともに、広報宣伝の拡充、総合的なホスピタリティの充実、相互誘導を目指すものです。

またこの地区にすでに存在する市民活動や、既存店舗も新たな観光メニューや事業化に組み込むことが、地域全体の観光推進への要因とも考えられます。

今後は、各施設に応じたターゲットを明確にしたソフト事業やコンテンツの立ち上げを検討します。

また、これらを「(仮称)恵庭溪谷インフォメーションセンター機能事業」と称して、地域関係団体の綿密な連携を基盤に、恵庭溪谷内の自然環境と産業遺産の維持・保全と観光振興への発展、展開へと図っていきます。

③自然景観や地域資源を活かす事業～新しい観光誘客コンテンツの立ち上げ

森林鉄道や恵庭鉱山など、知的好奇心を喚起する遺産の探索、歴史的価値の高い産業遺産の活用やモイチャン滝などの未活用の自然環境など新たな観光開拓による近隣観光地との差別化が、地域資源の発掘・振興に対する市民意識の高まり、健康志向、さらには体験型学習の拡充といった近年の傾向にも合致し、「アウトドアと歴史学習の融合」をコンセプトとした新しい観光メニューの立ち上げへと向かうものです。

また産業遺跡や自然景観の鑑賞に加え、そこに至る行程自体を「トレッキング」等のアウトドア体験として楽しむ「エコツアー」を展開し、将来的にはガイドを育成して、集客と収益性の確保を前提とした「コミュニティビジネス」として確立させ、組織の自立的かつ永続的な運営を目指すことも考えられます。

④産学官民連携による資源維持・保全活動プログラムの構築推進と人材の育成

「産業と文化の遺産を考える会・恵庭」などの市内関係団体や「一般社団法人恵庭観光協会」といった専門機関が連携し、地域が一体となった維持・保全活動のプログラムの構築や、自らがその事業推進における総括的なコーディネートを目指す手法も考えられます。

さらに歴史的知識や維持・保全のノウハウなどを総合的に習得する独自プログラムを構築し、一般市民への広報拡大から専門ガイド、専門スタッフの育成等も含む独自の観光事業としての体系化の展開も考えられます。

事業の健全な推進を図るためには旅行者、地域住民、観光業者、研究者、行政の

5つの立場の人々の協力がバランス良く保たれることが不可欠であり、環境の保全を図りながら観光資源としての魅力を享受し、地域への関心を深め理解を高めてもらう手段としてのプログラムの作成と地域・自然・文化と旅行者の仲介者（ネイチャーガイドなど）が存在することが望ましいと考えられます。

⑤事業化における官民の適切な役割分担と事業の推進体制～法手続き、整備と運営、ハードとソフトの役割分担の明確化

事業化において、避けられない問題が施設整備とその財源、また土地の立ち入り入りの許可手続きなどの問題です。

これらは法的専門性や公共性などを有するものもあり、民間事業者だけでなく、行政側との適切な役割分担が必要と考えられます。

また、施設整備の財源などには国の補助金などを検討します。種々の法手続きについては、申請主体や事業主体が個々のケースで異なる場合もあるので、行政側の主導、指導、助言に期待するものです。一方、運営管理は市内民間業者、関係団体などが、PFI や指定管理者制度、業務委託、賃貸借などの方法で独立採算制度を原則として、専門性と民間らしい発想、経験、実績でサービス向上と収益事業の展開が適当と考えます。

そのため、新たな民間事業者の誘導を積極的に進め、盤尻という地域名称を全面的に出した広報や地域内で連携した四季折々のイベントなどについて、一般社団法人恵庭観光協会を中心として地元との推進体制の構築に取り組むとともに、新たな盤尻地区のまちづくりを運営する事業体として盤尻地区エリアマネジメント組織（地域DMO）の設立など、事業推進体制の構築が必要と考えます。

（４）将来像

北海道の玄関口である新千歳空港や道都札幌に近い利便性と、支笏湖国立公園地区に隣接する自然環境に恵まれた盤尻地区は、景勝地の魅力を最大限に活かすことができる場所です。道道沿いの各施設の連携を深め、盤尻地区全体が一体的に取り組み、これまで未活用であった産業遺産などを加えることによって、満足度の高い恵庭独自のコンテンツを造成し、提供することが持続可能な盤尻観光にとって重要であると考えます。

また、盤尻地区の土地利用と沿道環境を適切にコントロールし、秩序ある土地利用と自然景観の保全が急務であると考えます。

東西軸のまちづくりを意識し、豊かな自然環境の中での子育てや住生活を提供できる森の中の優良田園住宅など、都市のブランド力を向上させたまちづくりの取組も重要です。

さらに昨今観光客のニーズは多様化し、複数の観光地を周るなど行動範囲の広域化の傾向にあります。

恵庭市においては、令和2年11月には道と川の駅花ロードえにわを核として花の拠点（はなふる）が供用開始し、令和4年にはフェアフィールド・バイ・マリオットホテルがオープンしました。また近隣の北広島市においては、ボールパーク構想や郊

外部にはキャンプ場がオープンするなど、滞在時間の延長に向けた取組みが進んでおります。

そうしたことから、広域連携の取組みとして近隣の知名度の高い観光地と併せて広域の周遊ルートに組み込むことにより、知名度向上と地域の活性化につなげることができます。

今後は道民の半数にもなる200万人規模が居住する札幌圏内を対象として、ネット化することで、盤尻地区をはじめとする市内の観光資源や観光拠点と連携し、車・自転車・人のを誘導する仕組みを創り、相乗的かつ広域的な地域活性化を目指す必要があると考えます。

(5) 今後の進め方

今後はこれら本事業構想案や以下個別事業構想などに基づき、個別の事業実施計画を作成し、取り組んでまいります。

4. 課題整理の方向性と主な個別事業構想

不足する点・課題等	課題整理の方向性	主な個別事業構想
【1】 広報宣伝の充実強化		
<p>■知名度不足 ■对外告知不足 ■明確なコンセプトやターゲットの設定不足</p> <p>・ 恵庭市内の一部利用者しか知られていない ・ 興味を持っている方が多い割に閉鎖的 ・ 情報受発信及び戦略不足</p>	<p>【対応の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ターゲット層への確実な伝達 ・ 地域を全面的打ち出した広報 ・ 各施設が道道沿いに位置する利点の活用 ・ 市内外の関係団体との連携による広報強化 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域一体の宣伝広報の強化実施 ・ 地区内施設一体パンフの作成 ・ ターゲットに応じたパンフ配架先の適切な選定 ・ 地区案内看板を2か所に設置（えこりん村入口付近、R453交差点付近） ・ シーニックパイウェイとの連携による広報宣伝の強化・広範囲化の実現 ○広報拠点施設（インフォメーションセンター機能）の設置 ○新たなキャッチコピー
【2】 集客・収益性の確保		
<p>■体験型の施設が少ない ■駐車場、飲食施設、トイレ施設、通信設備が不足</p> <p>・ スキー場は冬期みのみの営業 ・ 森林公園は冬期閉鎖 ・ 通年でのアクティビティがない ・ 来訪者への便益施設が少ない</p> <p>■産業遺産（森林鉄道跡等）の観光資源化への取組が不足</p> <p>・ 資源の活用不足 ・ 資源の有効性の認識不足 ・ ニーズ把握不足</p> <p>■地域内施設の一体性や事業者間連携が不足</p>	<p>【対応の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 飲食・物販の店舗誘致（スキー場、旧浄水場跡地など） ・ 地域内観光のビジネス化 ・ 通年での利活用策の検討 ・ 趣味の多様性・個性化への対応 ・ 新たな機能の付加 ・ 「点から線」への展開 ・ 時期、個人・団体など利用形態に応じた2次交通の充実 ・ 産業遺産の活用・事業化 ・ 緑のふるさと森林公園の活用の見直し ・ 市有地の活用、民間事業の誘導 	<ul style="list-style-type: none"> ○旧浄水場施設跡地の都市公園化 ・ 広報拠点施設（インフォメーションセンター機能）の設置 ・ 駐車場、トイレ等の整備 ○緑のふるさと森林公園の多機能化 ○市民スキー場通年化・多用途化 ○えにわ湖利用拡大（他ダムと連携したイベントの実施） ○ライトコンテンツの開発 ○渓谷における四季折々のツアーの実施 ○地域周遊日帰りツアーの実施 ○産業遺産の活用・事業化 ○自然景観の活用、産業遺産の広報宣伝強化 ○探索ツアーの定期的実施（産業遺産のヘリテージツーリズムなど） ○地域資源を活用したエコツーリズムの導入
【3】 産学官民の連携と資源維持・保全		
<p>■自然景観、産業遺産の維持・保全 ■産学官民の連携</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○維持・保全活動プログラムの構築 ○地元の歴史教育体験プログラムの確立 ○観光ガイドの育成（インフォメーションセンター等で活用） ○道道沿線の景観ルール策定 ○森の住宅（森の中に佇むイメージの優良田園住宅）
【4】 適切な役割分担		
<p>■良好な道路の維持・保全 ■国有林立入・活用協議 ■通信手段の確立 ■民間事業者の誘致</p>	<p>【対応の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ インフラの保全 ・ 問題点等の調整協議と法的手続き ・ 通信空白地域の解消 ・ 適切かつ効果的な土地利用 	<ul style="list-style-type: none"> ○道道の舗装補修や自転車歩行者道等の整備 ○国有林等協議（国・北海道） ○基地局等通信施設の導入調整 ○民間事業者による運営管理 ○各ゾーンの特長に沿った民間事業の誘導

5. 個別事業構想概念図

自然景観・資源の保全

- 道道沿線の景観ルール の策定
- 官民協力による維持・保全

花の拠点 はなふる

- 盤尻案内看板・パンフレット
- 盤尻観光発着場所
- 市内周遊(横展開)拠点



各ゾーンの特長に沿った民間事業の誘導

広報宣伝 (キャッチコピー等)

ライトコンテンツの開発

《事業の推進体制(目指す姿)》

- 全体マネジメントのための(仮)街道沿い関係者の組織化
- 産学官民連携による共同事業、役割分担
- 観光客の周遊性・滞留性の拡大のための連携(モデルルートの確立)
- 広告宣伝体制強化、インフォメーションセンター機能の付加による総合観光案内機能強化

6. 広域連携概念図

12



7. 基本方針別個別事業構想 事業着手スケジュール

基本方針		事業スケジュール（着手時期イメージ）		事業（実施）主体
		1年～3年以内	4年～10年程度	
■総合案内・広報機能の充実と既存施設の地域内連携				
「個別構想」	「具体策」			
地域一体の宣伝広報	地区内施設一体パンフの作成、ターゲットに応じたパンフ配架先の適切な選定			官庁・民間
	地区案内看板を2か所に設置（えこりん村入口付近、R453交差点付近）			官庁
	シーニックバイウェイとの連携による広報宣伝の強化・広範囲化の実現			官庁・民間
広報拠点施設の設置	インフォメーションセンター機能整備			官庁（運営は民間）
「点から線」への展開	地域の事業者間連携、地域連携協議会の立上げ、紅葉ツアー等の連携事業化			民間
新たなキャッチコピー	「シレットコ・シコツコ・パンジリ♪」、「ハコダテ・ススキノ・パンジリ♪」、道道の愛称等			官庁・民間
■景観や地域資源など新しい観光コンテンツの立ち上げ				
「個別構想」	「具体策」			
森林公園多機能化・市民スキー場周年化	民間事業者の誘導、一面花壇化（ルピナス、コスモス、菜の花、ひまわり）			民間
旧浄水場跡地の利活用	都市公園化によるインフォメーションセンター機能事業、駐車場、トイレ、飲食施設の整備			官庁・民間
恵庭溪谷利用拡大	ばんじり897の移転、駐車場拡大（国・北海道と協議）、四季に応じたツアーの実施			官庁・民間
恵庭湖活用拡大	ダムツアー等ライトコンテンツの企画・実施			官庁・民間
旧森林鉄道跡地の利活用	観光資源化（エコツーリズム、ヘリテージツーリズム）			官庁・民間
地域周遊日帰りツアー（モニターツアー）の実施	レンタカー、タクシー、バス会社との連携した2次交通の確保			民間
■産学官民連携による資源維持・保全				
「個別構想」	「具体策」			
自然景観、産業遺産の維持・保全	歴史教育体験プログラムの確立、観光ガイドの育成			官庁・民間
道道沿線の景観ルールの策定	道路景観計画、土地利用計画の策定			官庁
森の住宅	森の中に佇むイメージの優良田園住宅			官庁・民間
■官民の適切な役割分担				
「個別構想」	「具体策」			
インフラの保全	道道の舗装補修や自転車歩行者道等の整備			官庁
問題点等の調整協議と法的手続き	国有林協議、都市公園協議、景観ルール（国・北海道と協議）			官庁
通信手段の確立	基地局等の通信施設の導入調整			官庁・民間
民間事業者の誘致	各ゾーンの特長に沿った民間事業の誘導			民間

要望・調整
 事業着手

(参考資料) 審議等日程

日 程	項 目	協議内容
令和4年11月16日	第1回盤尻地区観光まちづくり懇談会	1. 構成員紹介 2. 設置趣旨等説明 3. 今後のスケジュール
令和4年12月22日	第2回盤尻地区観光まちづくり懇談会	1. 盤尻地区の強み・弱み 2. 課題等の抽出 3. 今後のスケジュール
令和5年 2月10日	第3回盤尻地区観光まちづくり懇談会	1. 盤尻地区観光まちづくり事業化 構想素案について
令和5年 3月22日	第4回盤尻地区観光まちづくり懇談会	1. 構想骨子案の決定

(参考資料) 盤尻地区観光まちづくり懇談会 構成員名簿 (敬称略、順不同)

No	所 属 等	氏 名	備 考
1	北海道大学大学院工学研究院土木工学部門 教授	高 野 伸 栄	
2	一般社団法人 恵庭観光協会 事務局長	沼 倉 健 一	
3	株式会社 KITABA 代表取締役	酒 本 宏	
4	恵庭商工会議所 経営支援課	出 南 大	産業と文化の遺産を考える 会・恵庭
5	株式会社リクルート北海道じゃらん 営業部 地域振興課 地域振興チーム リーダー	藤 崎 由 理	
6	株式会社あいコミ(FM e-niwa) 取締役	三 浦 真 吾	
7	株式会社テイクサン・トレーディング 代表取締役	竹 内 章	
8	北海道文教大学 国際学部国際教養学科 准教授	小山田 健	
9	NPO 法人まちづくりスポット恵み野 事業コーディネーター	平 井 梓	

【オブザーバー】

No	所 属 等	氏 名	備 考
1	国土交通省北海道開発局 札幌開発建設部千歳川河川事務所 漁川ダム管理支所 支所長	佐々木 強	
2	北海道空知総合振興局 札幌建設管理部千歳出張所 所長	京 野 英 隆	

【事務局】

No	所 属
1	経済部花と緑・観光課
2	企画振興部まちづくり拠点整備室

盤尻地区観光まちづくり事業化構想

令和5年10月

編集・発行 恵庭市経済部花と緑・観光課

〒061-1498 恵庭市京町1番地

電話 0123-33-3131

FAX 0123-33-3137

E-mail hanatomidori@city.eniwa.hokkaido.jp